

た	こ	『	『	す	人	作		基	素			り	熱	勇		も	走	て	た	手	
ま	の	異	走	作	間	者	し	本	晴			に	い	気	こ	に	り	し	短	を	私
に	よ	色	れ	品	の	の	か	要	ら			飛	キ	：	の	思	続	ま	編	伸	が
は	う	の	メ	を	内	太	し	素	し			び	ー	：	作	わ	け	っ	と	ば	生
、	な	作	ロ	数	面	宰	、	『	い			出	ワ	：	品	ず	る	た	い	し	ま
美	作	品	ス	多	の	治	本	で	物			し	ド	：	は	目	主	が	た	の	れ
し	品	』	』	く	醜	は	当	あ	語			て	が	：	、	に	人	、	こ	が	て
い	を	だ	だ	残	い	、	に	る	を			く	、	：	確	涙	公	ひ	こ	、	初
物	書	とい	け	し	部	小	そ		構			る	こ	：	か	を	の	た	の	め	て
語	こ	え	は	て	分	説	れ		成			。	れ	：	に	浮	姿	も	が	、	、
を	う	る	、	い	や	『	だ		す			。	で	：	か	べ	に	あ	、	こ	自
書	と	。	彼	る	弱	人	け		る			そ	で	：	バ		、	り	の	の	分
き	思	では	にと	。	い	間	で		上			れ	『	：			約	あ	『	こ	か
、	っ	なぜ	っ	そ	部	失	良		で			は	欠	：			束	一	走	の	ら
自	た	、	ま	ん	分	格	い		『			そ	か	：			を	気	れ	、	文
分	の	彼	さ	な	を	』	の		欠			れ	と	：			守	に	メ	、	学
自	だ	は	に	中	え	を	だ		か			で	言	：			る	読	ロ	、	小
身	ろ	、	こ	、	ぐ	は	ろ		せ			、	わ	：			た	み	ス	だ	説
に	う	彼は	この	この	り	じ	う		ない			純	ん	：			め	上	』	っ	に
対	か。				出	め、	か。					粋	ば	：			と	げ	だ		
												に	か	：			と				

する	一服の清涼劑にしたかったとも考えられ
る。	一方で、『善・愛・道徳・正義・友情・
信用』と	いった美辞麗句が、どれほど儚くて
空虚なものを、わざと滑稽な劇の中に皮肉	を込めて、世間の読者に訴えたかったのかも
しれない。そのような観点で今一度、この	『走れメロス』を読み返してみると、新しく
面白い発見があるに違いない。そこで私は、	主な登場人物について、敢えて否定的な立場
から、かなり辛辣な人物評価を試みようと思	う。
まず主人公のメロスであるが、物語の中	で彼の人物像は、随分と誇張されてはいるが、
大きく次のように分析できる。	まず第一に、彼は『他人を疑うことは悪だ』
という強い思い込みがある。確かに他人を疑	ってばかりいては、社会生活など成り立たな
いだろう。しかし、私にはデイオニスに象徴	される人間不信にも共感を覚えてならない。
物語の中でメロスのセリフに、『ああ、王は	

利口だ。』とある。私たちが暮らす現実社会の中には、残念なことに嘘の情報に溢れている。それをいちいち全て真に受けていては、詐欺の被害に遭ったり、生命を危険にさらすような犯罪に巻き込まれてしまうに違いない。	『人はお互いに信じ合う』ことが大切であると考え、それは正しい。だがメロスのように極端であってはならない。ましてや、自分の考えに合わないからといって、『生かしておけぬ。』と言いきなり城に乗り込み、デ	イオニスに対して罵っている。これでは、思慮が足りない独善者と批判されても仕方がないのではないか。	第二に、メロスには計画性がない。思いつきで行動し、後でどのような事態を招くかを計算しない人である。実際、メロスはたった一人で王城に乗り込んで、すぐに警吏に捕縛されてしまう。王の暗殺を実行するにしては、余りにも稚拙でお粗末な結果である。また、確実に三日後の日没までに戻って来られる保
---	--	--	--

証	も	な	い	ま	ま	に	、	親	友	の	セ	リ	又	ン	テ	ィ	ウ	ス	を	
人	質	に	差	し	出	し	て	い	る	。	私	が	セ	リ	又	ン	テ	ィ	ス	
の	立	場	だ	っ	た	ら	、	い	く	ら	事	情	を	話	さ	れ	た	と	は	
い	え	、	た	ま	っ	た	も	の	で	は	な	い	。	な	ぜ	、	何	の	罪	
も	犯	し	て	い	な	い	自	分	が	、	い	き	な	り	磔	刑	に	処	せ	
ら	れ	る	危	険	を	、	背	負	わ	ね	ば	な	ら	な	い	の	か	：	。	
で	き	れ	ば	、	メ	ロ	ス	の	よ	う	な	男	と	は	、	友	達	で	い	
た	く	は	な	い	、	と	考	え	る	ほ	う	が	自	然	だ	ろ	う	。		
	第	三	に	、	メ	ロ	ス	は	強	引	な	性	格	で	、	他	人	の	迷	
惑	に	つ	い	て	は	と	て	も	無	頓	着	で	あ	る	。	妹	に	向	か	
っ	て	、	結	婚	式	を	突	然	翌	日	に	行	え	と	命	じ	た	り	、	
そ	の	花	婿	に	対	し	て	、	ほ	と	ん	ど	ご	り	押	し	と	も	い	
え	る	態	度	で	、	挙	式	を	早	め	る	こ	と	を	納	得	さ	せ	て	
い	る	。	私	な	ら	、	『	あ	あ	、	実	際	に	こ	ん	な	男	が	身	
の	周	り	に	い	た	ら	、	マ	イ	ペ	ー	ス	す	ぎ	て	他	の	大	勢	
の	人	々	に	迷	惑	が	及	ぶ	ん	だ	ろ	う	な	。	』	と	考	え	て	し
ま	う	。																		
	ま	た	物	語	の	終	盤	で	、	メ	ロ	ス	が	日	没	ギ	リ	ギ	リ	
で	シ	ラ	ク	ス	の	町	に	た	ど	り	着	こ	う	と	、	必	死	に	走	
る	場	面	が	あ	る	。	だ	が	、	ど	れ	だ	け	そ	の	途	中	、	彼	

[illegible]

不安定で脆い部分を表現するため、これら	は敢えて、人間が持っている内面の矛盾や、	に、私の頭にふとある考えが浮かんだ。作者	つじつまを合わせようと、頭をひねるうち	かに頭は良さそうだった。	メロスとは互角以上の舌戦を演じている。確	日狂っている。しかし思えない。それでいて、	族や忠臣を次々と殺すなど、常識で考えれば	しても、人間不信だからといって、自分の家	離れたしたキャラクターである。ディオニスに		人物がいるだろうか。誰もがあまりにも現実	がいた。だが本当に、これほどまでに極端な	切る存在として描かれた親友セリヌテイス	象徴的に描かれている。さらに、他人を信じ	オニスは、疑うことこそ賢さの証であると、	守る男として描かれている。また、王のディ	についてしまふのだ。メロスは絶対に約束を	め、どうしても極端な性格の人物ばかりが目	設定や心理描写まで書かれていない。そのた	日走れメロス」は短編ゆえに、細かな人物
---------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------	----------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	-----------------------	--	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------

三	人	を	描	き	た	か	っ	た	の	か	も	し	れ	な	い	。	彼	ら	は	
み	な	、	何	か	突	き	抜	け	た	よ	う	な	性	格	の	持	ち	主	で	
あ	り	、	バ	ラ	ン	ス	を	欠	い	て	い	る	の	で	あ	る	。	し	か	
し	よ	く	考	え	て	み	れ	ば	、	実	は	そ	の	滑	稽	な	く	ら	い	
現	実	離	れ	し	た	人	物	た	ち	の	振	る	舞	い	こ	そ	、	こ	の	
作	品	を	読	み	終	え	て	、	一	番	面	白	い	と	感	じ	ら	れ	る	
部	分	で	あ	る	。															
	と	こ	ろ	で	、	メ	ロ	ス	は	確	か	に	約	束	通	り	日	没	ま	
で	に	刑	場	に	戻	っ	て	き	た	。	感	動	の	場	面	で	あ	る	。	
で	も	、	お	か	し	い	：	。	王	の	そ	の	場	の	行	動	で	あ	る	。
約	束	通	り	に	磔	刑	に	処	す	る	こ	と	も	忘	れ	、	許	し	を	
乞	う	デ	ィ	オ	ニ	ス	は	『	嘘	つ	き	』	と	い	う	こ	と	に	な	
り	は	し	な	い	か	。	で	は	な	ぜ	、	メ	ロ	ス	は	そ	の	最	後	
の	場	面	で	一	言	も	自	分	の	信	念	を	主	張	し	な	か	っ	た	
の	か	。	終	始	一	貫	、	自	分	に	嘘	を	つ	か	な	い	こ	と	が	
メ	ロ	ス	に	と	っ	て	最	も	大	切	な	正	義	な	の	で	あ	れ	ば	、
彼	は	王	に	向	か	っ	て	次	の	よ	う	に	堂	々	と	迫	る	ベ	き	
だ	っ	た	は	ず	で	あ	る	。												
『	さ	あ	、	ど	う	か	お	願	い	だ	か	ら	私	を	殺	せ	！	』		

[illegible]

そ	え	と	れ	か		異	の	最	を
し	、	で	た	な	作	な	太	後	直
て	馬	友	拳	り	品	る	宰	の	接
被害	鹿	情	げ	お	の	。	治	場	う
者	が	や	句	め	見	叶	が	面	か
と	付	信	に	で	方	わ	今	に	が
も	く	頼	、	た	は	ぬ	こ	つ	っ
い	ほ	を	自	い	、	願	の	い	て
え	ど	大	ら	人	読	い	世	、	み
る	の	事	の	に	み	で	に	彼	た
セ	お	に	命	は	手	は	生	が	い
リ	人	す	を	な	に	あ	き	作	も
又	好	る	落	か	よ	る	て	品	の
ン	し	自	と	っ	っ	が	い	に	だ
テ	を	分	し	た	て	、	た	込	。
ィ	演	に	か	か	さ	も	な	め	
ス	じ	酔	け	。	ま	し	ら	た	
で	る	い	た		ま	も	、	思	
さ	こ	し	、		に	作	こ	い	